

本堂修復・調査進む

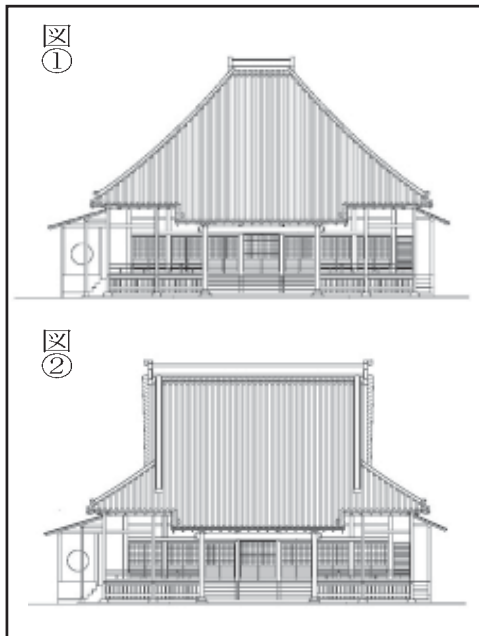
西教寺長ノ木本坊本堂の修復は、半解体とともに綿密な調査が進められています。私(編集者)は、大判小判が出てくるのを



期待していましたが、出てきたお金は一文銭でした。

さて、調査の結果、現在の本堂に至るまでに、長い時間をかけて少しずつ、様々に整備され、改造が加えられていることが分かりました。大きなところでは、後堂(本堂の裏部分)の下屋を広げたり、本堂正面に向かつて右手の縁を取り込んで外陣を広く(きつ)と少しでも多くお参りができるようにしたことなどが分かりました。

また、現在の屋根は入母屋造り(図②)ですが、骨



組みを調査したところ、建設当時は寄せ棟造り(図①)であったことが判明しました。設計士の藤田さんによると、江戸時代は幕府により、屋根の形などの建築規制もあつたようで、『京都府の近世社寺建築』一〇頁参照)、出て来た棟板を見ると、一九〇七(明治四〇)年に現在の入母屋造りに改めたとあります。「此の堂旧は寄棟と為す…大修繕を加えずんば則ち風雪に耐えず…工事漸く進みて上棟の式を挙ぐ」という言葉からは、当時の門徒僧侶の歡喜の様子が伝わってくるようです。

また、外陣中柱上の彫刻背部に次のような文字(右写真)が書かれています。活字に直すと以下(写真左枠内)のようになります。



御堂六代住順正代廿六年(天井) 此ノ大工和庄村シカタ中塩幸助也出来ス

安永五丙申三月十五日 大工和庄村■田ノ
当寺七代住務了瑞代二 中塩勘右衛門
廿六年シテ 楠木ニテ合天井を工ム 之作也
天井出来ス也 生年七十五才作也

「二覽のように、読んでみると「廿六年シテ天井」という文句が二度書かれています。この捉え方で全体が色々な意味に解釈できて、なかなか内容を特定しづらいたのですが、格天井ができた一七七六年と、六代順正住職職年の一七三四(享保十九)年(「灰峰山縁起」参照)との二つのほぼ確かな年代をもとに考えると、恐らく「御堂」が「六代住(職)

順正」の時に「大工中塩幸助」によつて建てられ、二十六年して一七七六(安永五)年七代了瑞の時に天井(格天井)を中塩勘右衛門がつくつたということではないかと思われれます。推測通りであれば、現在の七軒四面の本堂は一七七六年から二十六年を引き算して一七五〇年に完成したことになります。